江戸押絵羽子板

東京都知事指定
伝統工芸品マーク

江戸押絵羽子板は厳格な検査に合格した東京都知事指定の伝統工芸品です。

京鹿子娘道成寺

助六

曽我五郎

鎌倉権五郎景政

暫

御所五郎蔵（曽我綉侠御所染）

つづみ

藤娘

羽子板の意義

羽子板は扇などと同様に持ち手から先に広がっている「末広がりのめでたい形」と、羽根が災厄を「はねのける」に通じる事から、古来その縁起を尊んで人々に求められてきました。故に、羽子板特有の決まった形の中に押絵で作った躍動的な人物を如何に無理なく収めるかが職人の腕の見せ所であり、そこに生まれる様式美こそが押絵羽子板の命なのです。近年多く見られるような羽子板の上部が丸くなっているもの、上部よりも下の押絵が大きいものなど正面から見て羽子板の形状がわからなくなっているものは本来の縁起物としての羽子板の意味をなさなくなってしまいます。

羽子板は通常の伝統工芸品としてだけではなく、古くからの日本の風俗・習慣・文化なども受け継いでおり、飾ったときに羽子板としての形状がわからないものは日本古来の伝統文化さえも歪めてしまう事になります。

羽子板を飾る際にはまずは、正面から見たときにきちんとした羽子板のシルエットになっているのかを確かめましょう。

道成寺

金冠を被り、満開の桜の中のお寺が舞台。様々な場面があるが、桜模様の着物が多い。手には中啓を持っている場面が多い。この羽子板は物語全部を象徴するのではなく、主人公の一人の男性に一途に恋する場面を表しており、女の子が生まれた際には一人の男性に一途に尽くすお嫁さんになってほしいという願いから買われる事が多い。

汐汲

オリジナルは能の「松風」から来ている歌舞伎舞踊。須磨に流されていた在原行平を思い、汐を汲むという舞踊である。汐汲はかなりの重労働であり、ずっと一人の人を思っているというところから、子供が働き者になるように。好きな人に尽くすようにとの願いから買われる事が多い。

八重垣姫

歌舞伎の三姫のひとつ（他は、時姫と雪姫）。これは「本朝廿四孝」の一場面。元は中国の「廿四孝」（二十四の親孝行の話）に対して「本朝（日本の意味）廿四孝」。八重垣姫は武田家由来の兜と赤い着物に菊模様の着物、髪型は吹輪に花簪である。諏訪湖を飛んで親の危機を救う場面でもあるので、子供が嫁いでも親孝行になるようにとの願いから買われる事が多い。

富蔵

歌舞伎「四千両小判梅葉」の主人公で、江戸時代一番の大泥棒。おでん屋に化けてお堀近くで江戸城の様子を伺っている場面。御金蔵破りで四千両を盗んだという実話に基づいて書かれた話でこの歌舞伎から「ここは地獄の一丁目」とか「地獄の沙汰も金次第」という言葉が生まれた。この羽子板を家に置くことで、大泥棒がいるからコソ泥は自分の家には来ないという江戸っ子の洒落っ気で買われえる。

め組辰五郎

歌舞伎「神明恵和合取組」の主人公。大名お抱えの相撲取りと喧嘩が最大の見せ場。「豆辰」と言われた小柄な町火消と権力者に庇護されている相撲取りとの喧嘩が江戸の粋とされている。（町人が権力者に逆らうという風刺）火消は火の粉を払うところからこの演目の羽子板は火事除けやトラブルが起こらない様にという願いが込めて新築や新装開店、新居の祝等に贈られることが多く、辰に肖り辰年に人にも贈られる。羽子板としては龍（辰）の彫り物を描くのが職人の見せ場である。

押絵の見どころ

押絵細工の「押す」とは、もともと「貼る」と同じ意味で、古くは絵のパーツを裂で包むだけか、ごく少量の綿を入れて半立体的に製作したものでした。その綿を含ませるバランスが優れていればこそ、そこに単なる平面の絵とは異なる、レリーフ特有の美が生まれるのです。

近年の羽子板に、人物の顔が平面的でありながら、頭髪だけ異常に立体的であったり、胴体部分がほとんど衣裳着人形に近いほどに肥大化したりしているものを見かけますが、それらはすでに「押絵」といえないでしょう。必要以上の厚みは押絵の価値を高める要素とならないばかりか、むしろ押絵ならではの美を自ら放棄しているようなものです。

人形も押絵も顔の表情が大切なのはもちろんですが、上等なものほど手の表現にも優れています。指が何本なのか分からないような手や、右手と左手が同じ型を反転させたようなもの、顔と手の色や描線が異なるものには注意が必要でしょう。押絵の見どころのひとつは、その衣裳や小道具などに施された彩色の「上絵（うわえ）」です。歌舞伎や舞踊の衣裳にはそれぞれ決まり事がありますが、人形用の裂地を使用するとはいえ、既製の織物や染物だけでは、充分な表現が叶いません。そこで、裂の表面に、日本画に用いる胡粉や岩絵具などで繊細な文様を描き加えるのです。しかも、この「上絵」は単なる代用にとどまらず、その技法と質感が面相と相まって、押絵ならではの美をつくりあげる効果を持っています。

押絵羽子板の人物はどれも同じではありません

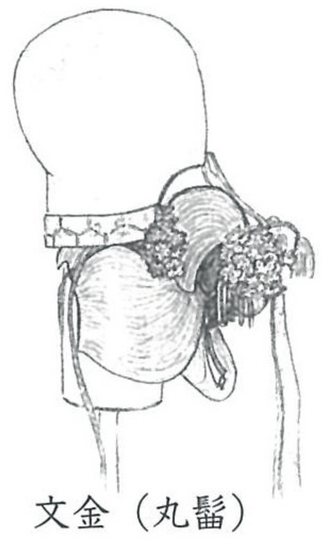
伝統的な押絵羽子板は、主として歌舞伎の主人公に取材した「狂言物」と、舞踊姿の美女を表現した「見立物」とに大別されます。日本を代表する芸能である歌舞伎は、それぞれの演目によって衣裳や髪型、化粧などに決まり事がありますから、それを写した羽子板の押絵も、その決まり事に則る必要があるのはいうまでもありません。しかし、現在流通している羽子板には、歌舞伎や舞踊の題名が記されていながら、その決まり事や特徴が表現されていないために、理解不能なものが多数見受けられます。面相も衣裳も髪型も同じで、手に扇を持たせているから「道成寺」だとか、鼓を持たせているから「浅妻」だというのは実におかしなことです。

例えば、髪型についても道成寺などは中高島田（丸髷）ピラ付き簪、汐汲は文金（丸髷）、藤娘は潰し島田（元禄髷）、禿は釘打ち島田、八重垣姫は「お姫様」ですので吹き輪というものに髪を巻付け花簪をつけており、衣装についても道成寺なら桜、八重垣なら「赤姫」と呼ばれている様に赤い着物に菊の模様と決まりごとがあり、また、その演じられる時代や身分により装束も違います。

京鹿子娘道成寺・白拍子花子

中高島田（丸髷）

汐汲み



文金（丸髷）

本朝廿四孝・八重垣姫

吹き輪

江戸押絵羽子板の職人と羽子板市（浅草寺歳の市）

羽子板は明治後期まで子供のいる家庭のお歳暮として送られる風習がありました。江戸最古で最大、また途切れることがなく未だに継続している「歳の市」は浅草寺にて毎年十二月十七日～十九日に行われ、その歴史は三百五十年以上あります。羽子板も歳の市の初期から売られており、戦後は羽子板を売る店が多くなり通称「羽子板市」と呼ばれるようになりました。日本橋に人形問屋が多かったのに対し、浅草界隈には節句人形などを作る職人が多く住んでいました。特に羽子板職人は浅草寺歳の市が盛んで羽子板を売る店が多く軒を連ねていたのでほとんどが現在の台東区（旧浅草区）に住んでいました。江戸押絵羽子板は浅草に育てられ、発展したと言っても過言ではないのです。浅草には江戸三座と呼ばれる歌舞伎を上演する芝居小屋も浅草寺の裏手にあり、職人は歌舞伎を見て勉強しながら面相や押絵を作成したのです。現在の江戸押絵羽子板の職人はこの羽子板市に皆携わっており、仕事のルーツは浅草にあります。歌舞伎は江戸時代の道徳教育の一つでもあり、これを熟知しているからこそきちんとした羽子板を作ることができ、さらに江戸最古のお寺である浅草寺のご縁日で買うからこそ縁起が良いとされています。

錦絵「羽子板見世の賑い」明治二十五年、香朝楼豊斉筆
筆者、豊斉は後に四代豊国を名乗った浮世絵師。売り手も買い手も役者の似顔絵になっていているのは、江戸の洒落。　［吉徳これくしょん 所蔵］

東京都知事指定の「江戸押絵羽子板」について

「江戸押絵羽子板」及び「江戸押絵」は、東京都雛人形工業協同組合が東京都の厳格な検査に合格し、東京都知事の指定を受けた伝統工芸品であり、東京都雛人形工業協同組合の会員により作成されたもので、製造工程が手作業によるもの、伝統技法を用いて作成され、その材料も伝統的に使用されたものに限られ、もちろん東京都にルーツがある製造業者に限られます。伝統の技法による押絵細工ではないもの、面相が胡粉や膠などの日本画材で作成されていないもの、スクリーン印刷やエアブラシを使用したもの、押絵が白い綿でなく、固い色付きの化繊でできたもの、面相（顔の部分）の厚みと胴体部分の厚みが揃っていないもの、木製の簪がついていたり、着物にクリスタルなどが貼られているものなどは、本来「江戸押絵羽子板」と呼ぶことはできません。また、「江戸押絵羽子板」は伝統文化も引き継いでいる工芸品ですので、押絵になっている人物も歌舞伎を題材としたものも多く、きちんとした髪型、装束で作成されていなければならず、名前だけ「江戸押絵羽子板」と称していても、正式な伝統の技法と型で制作していないものは縁起物としての江戸押絵羽子板ではありません。

毎年十二月十七日～十八日に開催される浅草寺歳の市（羽子板市）。浅草寺の歳の市は、三百五十年以上一度も途切れることなく続いていて、とても縁起の良い市と言われています。［撮影 坂巻一之助］

羽子板のケースについて

押絵羽子板は元来、ガラスやアクリルのケースに入れて飾るものではありませんでした。ケースは羽子板の末広がりという縁起の良いかたちを箱に閉じ込めてしまうことでもあります。伝統的な飾り方は羽子板をそのまま長押（なげし）にさしたり、大きいものは床の間に立てかけるようにして飾りました。

飾る事情によりケースを必要とする場合は、主役である羽子板とそぐわない様な飾りのついたケースを避け、できる限り枠のシンプルなガラス製のケースで飾りましょう。毬などの飾りがついているケースもありますが、羽子板との関係のない小物や模様などのないものが良いでしょう。また付属品としては羽根つきの羽根を一緒に飾るのが良いでしょう。羽根は、鳥の羽根と無患子（むくろじ）という木の実でできていて、無患子は字の如く子供が患わないとされ、かつては薬として重用されていました。また、羽根をついた時に鳴る「カーン」という大きな音が厄除になるという意味のある縁起の良いものです。羽子板をケースで飾る場合にはできるだけシンプルな物で、鑑賞する羽子板の邪魔にならないもの、できれば付き物である羽根を合わせて飾ると良いでしょう。

私たちは一世紀以上に渡り節句人形製造業として『江戸押絵羽子板』を制作してます。

むさしや豊山	屋号：むさしや	東京都墨田区石原
安藤造花社	屋号：眼楽亭	東京都葛飾区東金町
西山鴻月	屋号：成駒屋	東京都墨田区向島
南川禄三郎商店	屋号：たかさごや・高砂	東京都葛飾区高砂
長谷川人形店	屋号：やまとや 金山	埼玉県新座市菅沢
水門商店	屋号：きじや水門際物店	東京都台東区元浅草
小林工芸		東京都足立区伊興

東京都雛人業工業協同組合
http://hina-ko.jp/index.html

東京歳之市羽子板商組合
http://www.asakusa-toshinoichi.com

協力：吉徳資料室